様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　７ 日現在

機関番号：１３２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００９５１

研究課題名（和文）光明皇后の造営事業からみた奈良時代造瓦・供給体制の研究

研究課題名（英文）The study of the system of roof-tile production and supply in Nara period from construction projects by Empress Komyo

研究代表者
次山　淳（TSUGIYAMA, Jun）

富山大学・学術研究部人文科学系・教授

研究者番号：８０２６００５８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：奈良時代、平城京周辺において行われた造営事業の実態を考古学の立場から解明するために、光明皇后による造営事業と造瓦に着目した。光明皇后による造営事業は、その対象遺跡の位置と所用瓦の系譜から、A（法華寺下層他）、B（興福寺他）、C（東大寺上院地区他）の３グループに分けられる。3者には相互関係も認められる。また、その造瓦には、平城宮の造瓦とは異なる独自の部分と関係する部分が存在した。光明皇后には、皇族としての性格と藤原氏としての性格の両面があるが、造瓦に関しては、父藤原不比等以来の家産を利用していたとみることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
奈良時代、平城京周辺では、宮殿、官衙、寺院などの造営事業が行われたが、その組織・運営のありかたについて、個別事例の実態を明らかにし、全体を構造的に把握することが課題である。本研究では、光明皇后の造営事業を対象とし、造営に関わる諸要素のうち考古資料である瓦からその実際を検討した。この成果は、平城京および京周辺の造営事業における事例研究をなすとともに、宮と京、宮と寺院、官と私という構造的な視点に具体的な材料を提供するものである。

研究成果の概要（英文）：In the eighth century, Nara period, in and around the Nara Capital, many construction projects, palace, government offices, and temples, had carried out. The problem is to reveal the ways of organization and management of each project and to recognize hole structure of construction projects with archaeological evidence, roof-tiles. This study pay attention to the construction projects by Empress Komyo(701-760). They were divided three groups according to their locations and kinds of roof-tiles used at each site. These groups had relations with each other. Roof-tile productions of these groups was different from those of the Nara Palace. But on the other hand, they had some similarities with those of the Nara Palace. Empress Komyo was both a member of the Imperial Family and of the noble family, Fujiwara clan. In the roof-tile productions, she used her father, Fuhito’s inheritance.

研究分野：考古学

キーワード：光明皇后　造営事業　造瓦　藤原氏

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者である次山は、2017 年より勤務地である富山県・越中国分寺の創建軒瓦について検討をおこない､越中国分寺創建の実際とその背後にある事情(当時の国司と中央との関係など)を追求するために、創建瓦の祖型と考えられる畿内の軒瓦を検討した。この作業の過程で、モデル候補の一つである単弁八葉蓮華文軒丸瓦（平城宮・京軒瓦型式 6314Ｅ、以下 4 桁の数字とアルファベットは、平城京での型式表記に従う）が、法華寺とその周辺および東大寺上院地区で出土しており、これらの遺跡が光明皇后の造営事業と関わりをもつこと、この瓦が皇后宮職所管とされる奈良県歌姫西瓦窯で焼造されていること、製品には一般的なつくりの瓦と釉薬をかけた彩釉瓦があり、施釉瓦としては最初期の製品となることなどが知られた。

さらに、これらの遺跡と出土瓦は、平城宮、興福寺、東大寺、法隆寺などとも関係が深いことから、光明皇后による造営事業全体を対象として、その造瓦・供給体制を通時的・系統的な視点から俯瞰的に整理・検討することで、平城京での造営事業における造瓦・供給体制全体の解明に寄与するものと考えられた。

２．研究の目的

奈良時代、都である平城京とその周辺の地域では、宮殿、官衙、寺院など数多くの造営事業が官を中心におこなわれた。こうした造営事業については、古代史、建築史、美術史、仏教史等の立場から、その組織、運営、歴史的な背景など多様な観点のもとに論究されてきた。

考古学の立場からは、遺跡の発掘調査をつうじて、遺構・遺物の検討がおこなわれ、なかでも瓦塼の研究によって、所用瓦の型式学的研究にもとづく系譜・系統関係、工房と瓦窯からみた生産・供給関係など造営体制の一端が明らかにされてきた。そうしたなかで、平城宮・京における軒瓦の資料の蓄積、型式学的研究および編年研究の進展にともない、宮と京、宮と寺院あるいは官と私といった対比によってこれを理解しようとする見方も提示されている。

このような複数の関係性を内包する平城京周辺の造営事業と造瓦について、その全体的な構造を俯瞰的に捉えていくためのひとつの視点として、光明皇后（701～760）により行われた造営事業に着目し、造瓦を中心に検討することを、本研究の目的とした。

３．研究の方法

光明皇后あるいはその家政機関である皇后宮職との関りが指摘されている造営事業には、平城京および恭仁京の皇后宮（旧藤原不比等邸宅地・法華寺下層遺跡を含む)、興福寺五重塔、同西金堂、法隆寺東院、東大寺前身寺院（金鐘寺・福寿寺・金光明寺等)、新薬師寺、香山寺、東大寺、法華寺等があるが、これらを地理的な位置と所用瓦のありかたから整理すると、Ａ：平城京・皇后宮、法華寺、法隆寺東院、恭仁京・皇后宮、Ｂ：興福寺五重塔、同西金堂、新薬師寺、Ｃ：東大寺東方山麓の寺院群、東大寺の３グループにわけることができる。さらに、その所用瓦の生産に関わる奈良県歌姫西瓦窯、京都府音如ヶ谷瓦窯をＡに、京都府梅谷瓦窯、奈良県荒池瓦窯をＢに加えることができる。

軒瓦の先行研究からは、ＡとＢではそれぞれグループ内での系統的な結びつきが認められる一方、相互の関係も知られ、ＣからはＡ・Ｂそれぞれに関係する軒瓦、および彩釉水波文塼、彩釉軒瓦が出土している。また、光明皇后によるこれらの造営事業が、奈良時代前半から中頃にかけて時間的な連続性をもっていること、宮と京、宮と寺院、官と私という関係を縦横に結んでいることも、この視点の有効性に見通しを与えている。

以上をふまえて、瓦塼を資料に光明皇后の造営事業の時間的・空間的構造を明らかにするための手続きとして、上記の３グループの遺跡について、個々の造営事業とそれにともなう造瓦に関する史・資料および先行研究を収集・整理し、資料と研究の現状を確認する。そのうえで研究の現状をふまえ、軒瓦の系統性から各グループ内での造瓦のありかた、そしてグループ間のありかたを時間的・空間的に検討していくこととした。また、瓦塼の先行研究については、実物資料との対比作業を念頭に、製作技術の観察記述を収集することに努めた。

４．研究成果

(1)　Ａグループ

このグループには、光明皇后の居所であった父藤原不比等邸宅地(後の法華寺)と法隆寺東院、前者の所用瓦の生産地である歌姫西瓦窯、隣接する音如ヶ谷瓦窯がある。

①　藤原不比等邸宅地（後の法華寺）の主要な所用瓦は 6285A-6667A である。これらは、笵傷の進行、製作技術、軒平瓦の顎形態の変化などから 4 段階（あるいは 3 段階）の変遷が理解されており、当初段階から最終段階まで当地で出土する。3 段階以降は歌姫西瓦窯で生産されている。これ以前の生産については、音如ヶ谷瓦窯で製品が出土しているが、具体的な瓦窯は不明である。

②　法隆寺東院の創建軒瓦は、6285B-6691A である。この 6285B-6691A は、前述の 6285A-6667A の系譜上にある。

③　瓦笵使用期間の初期段階の 6285B-6691A が藤原不比等邸宅地周辺で出土することから、当初 6285B-6691A は、藤原不比等邸宅地において 6285A-6667A の補足瓦として製作され、その後に法隆寺東院の所用瓦となったとみられている。

④　史料にもとづく光明皇后の東院造営への関与と造営年代に関する先行研究からは、遅くとも天平 9 年（737）には東院の造営がおこなわれはじめていたとする見方が強いことを確認した。したがって、6285A-6667A と 6285B-6691A の交替の下限も天平 9 年前後とみることができる。

⑤　軒平瓦 6691A の瓦笵は、その後恭仁宮大極殿・内裏所用瓦の製作に使用され、還都後の平城宮第二次大極殿院で再度使用される。6285B も恭仁宮で出土する。このことから、法隆寺東院でのこの瓦笵を用いた製作の下限が、恭仁宮の造営期間（天平 12 年(740) 12 月～15 年(743)）となることが知られる。

⑥　法華寺旧境内および左京二条二坊十五坪では、彩釉水波文塼および彩釉軒瓦 6314E・6667D が出土し、Ｃグループの東大寺上院地区との関係がみられる。また、歌姫西瓦窯で彩釉の 6667D が焼成されていた可能性がある。

⑦　歌姫西瓦窯に隣接する音如ヶ谷瓦窯では、法華寺所用瓦が生産されていくことが判明しており、この地域の瓦窯群が、引き続き不比等邸宅地・法華寺の造瓦を担っていった。

(2)　Ｂグループ

このグループには、興福寺、新薬師寺、その瓦窯である梅谷瓦窯、荒池瓦窯がある。

①　興福寺の中心伽藍から出土する軒瓦の主体は、興福寺式軒丸瓦 6301A・軒平瓦 6671A であり、各堂塔の造営には、これらが継続して用いられたと考えられている。

②　6301A については、笵傷の進行から 5 段階（6 段階）の変遷が考えられている。光明皇后の造営になる五重塔は、第 2 段階に位置づけられている。西金堂は、不明な点が多いが第 3 段階の可能性がある。

③　梅谷瓦窯では、6301A・6671A を主体として生産がおこなわれた。6301A には笵傷がなく、興福寺創建期の瓦窯と考えられる。その後、これらの生産は荒池瓦窯に移動したと考えられているが、検証材料に乏しい。

④　興福寺出土の軒平瓦 6682D の検討では、6682D が中金堂院回廊の一部に使用されたのち、北円堂院に使用されたことを指摘する。このことから、その生産の下限を養老 5 年（721）とみる。興福寺中心伽藍の造営では、天皇家の発願した堂舎の造営に平城宮式軒瓦が使用されたとする指摘があったが、この点に対して具体的な検討材料を加えるものである。また、瓦当面縄叩きの類似性から 6667A との対比がおこなわれており、6667A の型式組列に年代の定点を与えるものとして期待できる。

⑤　新薬師寺金堂と荒池瓦窯 2011 年度調査地での成果は、くしくも近接した時期に生産地と供給先の両者の調査が行われ、その関係が判明した貴重な事例である。従来知られていなかった新薬師寺創建瓦のありかたが判明したばかりでなく、寺系の興福寺式である 6301I・6671J と宮・京系の興福寺式 6301B・6671B とがともに生産されていたことは、東大寺丸山西遺跡でのありかたを検討する際の比較資料となる。

(3)　Ｃグループ

Ｃグループには、東大寺丸山西遺跡、東大寺上院地区、香山堂跡がある。これら東大寺東辺の 3 遺跡では、史料上存在の知られる金鐘寺、福寿寺などの寺院・堂舎を、それぞれの遺跡とどのように結びつけ、比定するのかが大きな課題であり、異論も多い。

①　丸山西遺跡では、6301A・6671B などＢグループの興福寺式軒瓦が主体を占める。寺系と宮・京系がともに出土することに特徴があるとされた。

②　東大寺上院地区では、6285A・6667A、6285Bb・6691A といったＡグループの軒瓦が出土する。6691A の平瓦部凸面の縄叩きは、恭仁宮内裏のものと共通する。この地区では、彩釉水波文塼および彩釉軒瓦 6314E・6667D が出土し、この点でもＡグループとの関係がみられる。

③　香山堂跡では、平城宮東院地区と同笵例のあるものが出土する。

④　Ｃグループでは、それぞれの遺跡で当初は異なる系統の軒瓦を出土するところに特徴がある。前 2 者は、Ａ・Ｂそれぞれのグループの軒瓦が供給されている。

⑤　次段階になると、6282-6721 系が 3 遺跡に共通してみられる。

(4)　Ａ・Ｂグループの造瓦の独自性とその他の造瓦との相互関係

①　Ａグループ・Ｂグループともに軒丸瓦では接合式での製作を続ける。

②　Ａグループの軒平瓦は、一枚づくりを導入し、段顎から曲線顎Ⅱへの変化が、平城宮・京のひとつの年代的基準となるようなありかたを示す。一方で、Ｂグループでは、新薬師寺創建時（天平 19 年（747）・軒瓦編年第Ⅲ期）まで、粘土板桶巻作り、段顎が残存するなどこうした変化に揃わない側面が認められる。

③　このように、両者には宮の造瓦に足並みを揃える要素と、伝統性を保持する要素が認められるが、両者の相違は、瓦屋の立地のうえでＡグループは中山瓦窯など宮へ供給した瓦窯群と近いこと、またＡグループの造瓦が恭仁宮造営のための造瓦に組み込まれたことなどが考えられる。

④　Ａ・Ｂ間では、興福寺食堂出土の 6667A、法華寺旧境内出土の 6301A のように製品の相互移動が認められる。しかし、技術的な相互関係はこれまでの研究で言及されていない。ただし、興福寺式ではないが、興福寺出土の 6682D では、歌姫西瓦窯で特徴的に施される軒平瓦の瓦当

面縄叩きがみられることが指摘されており、造営事業のレベルでみれば、Ａ・Ｂグループ間で接点があったことも想定される。

⑤　Ａ・Ｂグループと宮・京系との相互関係についてみると、法隆寺東院所用の 6691A には、平瓦部凸面に格子叩きがおこなわれるものがあり、平城宮・京出土の軒丸瓦 6135A、軒平瓦 6688A・B との関係が注意されている。

⑥　奈良時代における彩釉瓦塼の製作技術は、8 世紀中頃段階までは他の遺跡でみられないことから、Ａ・Ｂグループ内で保持されていた可能性が高い。

(5)　光明皇后の造営事業における造瓦のありかた

光明皇后の造営事業における造瓦は、軒瓦に関していえば、基本的に父藤原不比等の代から 2 つの系統の瓦笵と文様を受け継いでおこなっているといってよい。また、東大寺東辺での造寺活動においても、丸山西遺跡、東大寺上院地区においては両グループからの供給が認められる。

瓦屋・瓦窯についても、こうした理解が妥当である可能性が高いが、おそらくは不比等薨去後の動向として、Ａグループでは、所在の明かでない最初期の瓦窯から歌姫西瓦窯へ、Ｂグループでは梅谷瓦窯から他の瓦窯（荒池瓦窯の可能性が高い）への移動が認められることも注意される。

光明皇后の諸活動の経済的基盤については、これまで父不比等の家産の継承という側面と、天皇家としての財源という 2 つの側面から検討が加えられてきた。事業を具体化する手段とそのための経済的基盤をそれぞれどこに求めるのかという点については個々に検討が必要であるが、光明皇后の造営事業における造瓦においては、家産の継承とその利用という性格が読み取れる。このことは、Ａ・Ｂグループの造瓦が、必ずしも官の造瓦と一体的ではなく、独自性がみられたことにも現れているといえよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>次山　淳 | ４．巻<br>第77号 |
| ２．論文標題<br>光明皇后の造営事業と造瓦ノート（3）藤原不比等邸宅地の軒瓦 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>富山大学人文科学研究 | ６．最初と最後の頁<br>15-36 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>次山　淳 | ４．巻<br>第78号 |
| ２．論文標題<br>光明皇后の造営事業と造瓦ノート（4）新薬師寺の創建瓦 | ５．発行年<br>2023年 |
| ３．雑誌名<br>富山大学人文科学研究 | ６．最初と最後の頁<br>59-69 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>次山　淳 | ４．巻<br>第75号 |
| ２．論文標題<br>光明皇后の造営事業と造瓦ノート（1）法隆寺東院の創建瓦 | ５．発行年<br>2021年 |
| ３．雑誌名<br>富山大学人文学部紀要 | ６．最初と最後の頁<br>53-75 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>次山　淳 | ４．巻<br>第76号 |
| ２．論文標題<br>光明皇后の造営事業と造瓦ノート（2）法隆寺東院の造営と光明皇后 | ５．発行年<br>2022年 |
| ３．雑誌名<br>富山大学人文学部紀要 | ６．最初と最後の頁<br>19-32 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>次山　淳 | ４．発行年<br>2024年 |
| ２．出版社<br>富山大学 | ５．総ページ数<br>112 |
| ３．書名<br>光明皇后の造営事業からみた奈良時代造瓦・供給体制の研究 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|